井上 靖における万葉集受容

工藤 茂

はじめに

日本の近代以降の文学者で、それ以前のいわゆる古典を自己のなかに受容し、そこから創作を生み出してきた作家は決して少なくない。たとえば森鷗外、尾崎紅葉、樋口一葉、谷崎潤一郎、芥川龍之介、菊池寛、室生犀星、横光利一、堀辰雄、太宰治、三島由紀夫、円地文子など、思いつくままにその名前を挙げても十指に余る。平山城児・志村有弘編「古典に取材した近代文学一覧」[1]によると、一〇九人にものぼる文学者の名前があげられている。

もちろんこれらの人々が日本の古典だけを摂取したわけではなく、外国文学の多様な影響を受けていることは、すでに周知の事実である。むしろ外国文学の受容がその作家の核を形成している場合が多く、その核の具象化の段階において意識的に日本の古典の型が摂取された、と考えられる作家も決して少なくない。森鷗外、谷崎潤一郎、芥川龍之介などは、その代表的な例であろう。

このように複雑で多様な古典や外国文学の受容が、日本の近代文学を形成してきた。井上靖の場合もまた例外ではない。彼の『私の自己形成史』に、シャルル・ルイ・フィリップの『ビュビュ・ド・モンパルナス』を読んで深い感銘を受けたことや、スタンダールの『赤と黒』、フローベルの『マダム・ボバリー』から文学作品の本質を学んだこと、さらにバレリーの純粋詩とかフランスの象徴詩について、京大の哲学科の友人を通じて間接的に学んだことが述べられている。また同じく彼の『歴史小説の周囲』[2]には、中国、西域、日本に取材した作品の土壌を培った各国の歴史書、文学書、古典が挙げられている。これらの多様な受容のなかから、ここでは井上靖がどのような形で『万葉集』を受容し、それを作品のなかに形象化していったかを考えてみたい。

一

井上靖の作品で、直接的に『万葉集』と関係のある作品を列記してみると次のようになる。

(一)『私の自己形成史』（昭三五・5～11）「日本」
(二)『夜の声』（昭四二・6～11）「毎日新聞」夕刊
(三)『額田女王』（昭四三・1～四四・3）「サンデー毎日」
(四)『四角な船』（昭四五・9～四六・5）「読売新聞」
(五)『星と祭』（昭四六・5～四七・4）「朝日新聞」
(六)『美しきものとの出合い』（昭四六・1～四七・3・7）「文藝春秋」
(七)『歴史小説の周囲』（昭四八・2・24刊）講談社
(八)『わが一期一会』（昭五〇・10・15刊）毎日新聞社

（以上のほかになんらかの形で『万葉集』と関係があると考えられるものに、『黯い潮』（昭二五）、『氷壁』（昭三一・11～三二・8）、「風」

（昭和四五）、『欅の木』（昭四五）などがある。）

右に列記したもののうち、㈡、㈢、㈣、㈤は小説、㈠は自伝、㈥は美術に関する随筆である。なお㈥については、そのなかの一編「15　飛鳥の石舞台」に万葉の歌が引用されている。㈦は自作解題で、そのなかの二編、「大和朝廷の故地を訪ねて」（昭四四・3「太陽」）と「飛鳥の地に立ちて」（昭四五・12「月刊文化」）という紀行文に、『万葉集』が登場する。㈧はその題名がそのままその主題を語っている随筆集であるが、そのなかの四編、「別離――木の下蔭」、「小説ノートから――生と死の間」「小説ノートから――紫草のにほへる妹を」、「新しき年に――春近し」に、『万葉集』の歌が見えている。これらの作品のなかから、彼の万葉集受容の特色を示す作品を取り上げ、拙論を進めていきたいと思う。

井上靖と『万葉集』との出会いは、彼の中学生時代であった。彼は大正一〇年四月二日、浜松師範付属高等小学校一年を終了して、静岡県立浜松中学校（現、静岡県立浜松北高等学校）に入学した。翌大正一一年三月二八日、二年に進級した上で同校から転学。同年四月一日、静岡県立沼津中学校（現、静岡県立沼津東高等学校）に転入学した。それまで浜松の師団にいた父が、台北衛戍病院長に転任したため、沼津にある父方の姉の婚家先に下宿することになったからである。この沼津中学校には前田千寸という図画と国語の教師がいた。『黯い潮』に登場する佐竹雨山、『夏草冬濤』の眉田という教師の原型はこの人である。前田は河出書房から『むらさき草』という本を出し、後に岩波書店から『日本色彩文化史』という大著を出版した人で、当時、日本の古代の色彩の研究をしていた。中学の国語の時間に、芥川龍之介や谷崎潤一郎の短編を井上靖たちに読ませた教師で、生徒もそれとなく尊敬していた人であった、と井上は書いているが、この人から「万葉集」の授業を受けたのかどうかは不明である。いずれにしろこの沼津中学において、井上靖は『万葉集』との最初の出会いをもつことになった。

「私は中学時代に、万葉集の『剣大刀いよよとぐべし古ゆさやけく負いて来にしその名ぞ』という大伴家持の歌を読んで、この歌に心を打たれた」と『私の自己形成史』に書いている。

この歌は周知のとおり、『万葉集』巻第二十に収められている「族に喩す歌」の第二首めの短歌であって、その左註が『続日本紀』の記事と相違しているために、いろいろと問題のある歌であるが、作品の質は高い。山本健吉も「これは家持の長歌としては、力を籠めて作ったものだが、作品としては第二首目の短歌がよい。さらでだに衰運に傾いた大伴家の人々に、家持はその家名の古く、また重んずべき自覚を甦らせようとした。[3]」と評している。

井上靖はこの大伴家持の歌の「さやけく負いて来にしその名」という表現に眩惑され、「このような歌を詠む家持も、またこのような歌に依って叱咤激励される子供たちも何と倖せであろうか」と思い、「自分の祖先にも一人ぐらい世に誇り得る人物は居ないものだろうか」と、「自分の家系というものに関心を持った」のであった。そうして、彼が生れた時にはもうすでにこの世にはいなかった曽祖父の潔という人物によって、辛うじてその自尊心を支えることができた。潔は天保一四年三月一五日、玄俊二男として静岡県田方郡上狩野村湯ヶ島に生れ、明治三四年一月一一日に亡くなっている。初代の軍医総監を勤めた松本順の門下生として医学を修め、韮山の代官江川家のお抱え医者となったり、静岡県立病院の初代院長をやったりして、田舎の医者としては盛名を馳せた人物であった。彼はこの曽祖父のことを曽祖母のひろからではなく、潔の妾であり、後にその養女として入籍した祖母かのから、尊敬すべきものとして教えこまれた。彼はこのことを『私の自己形成史』に次のように書いている。

「この曽祖父潔のいいところも悪いところも、なべて、私は妾の老婆の

立場から、尊敬すべきものとして教えこまれたのであった。私は潔の愛人の口を通して、彼女の立場から、曽祖父潔のあらゆる行動を是認させられるというより、讃歎の念を持って肯定させられたのであった。

勿論、私が曽祖父の妾である老婆に育てられたのは幼時であったが、幼時に彼女に依って私の心の中に造り上げられた曽祖父潔のイメージは、中学時代に新しくわが家系の代表選手として鮮かに浮かび上って来たのであった。（後略）」

中学時代に接した家持の歌は、曽祖父潔の人間像を彼の心象の中で、一家の家系の代表者として観念化し、巨人化するという特殊な影響を井上靖に与えた。後年、『淀どの日記』の浅井久政、『蒼い狼』の主人公、『あした来る人』の梶大助、『氷壁』の常盤大作、『夜の声』の千沼鏡史郎などのスケールの大きな人間像を描き出していく要因が、ここに潜んでいたと考えられるのである。そういった意味で大伴家持の歌は、井上靖の小説の一特色を生み出すという、深い影響を彼に与えたのであった。

二

井上靖がそれ以降、折にふれて『万葉集』に接していたのではなかろうかという推測は、かつて「挽歌の系譜」[4]という小論に述べておいた。それが具体的に作品となって結晶したのが『夜の声』である。

この小説の主人公千沼鏡史郎は、小学校長、町長を勤めた人物で、教員時代から万葉集に取り憑かれた「趣味の万葉研究家であり、読書家であり蒐集家である」といった人間として設定されている。そういう点では、少年のころ三島神社宮司、権田直助について国文学を修め、岩城魁に師事して漢文学を学び、やがて小学校の訓導となって各地の小学校を歴任し、湯ヶ島小学校の校長を最後に退職した井上靖の父方の伯父、石渡盛雄氏がその直接のモデルとして考えられる。しかし、この主人公がある日東京で交通事故に遇い、入院中に神の声を聞いて、万葉時代を理想とする社会を求め、かつ日本の乱れた世を正すために各地を旅行するというこの小説の筋立から考えると、やはり前述したように、この主人公には、井上靖の大伴家持観が投影しているのである。

この小説のプロットに、『おくのほそ道』と『ドン・キホーテ』のそれが使われていることについては、かつて述べた。[5]今考えると、ここにはまた日本の文芸の一つの型である貴種流離譚も重ね合わされていたのであったが、ここでは万葉集の受容という点に焦点を絞って考えてみたい。

後掲の「一覧」に示したように、『夜の声』には五十四首に及ぶ万葉の歌が引用されている。枕詞や地名として引用されているものに関しては、その歌を対照させることを避けてあるから、実際には六十首以上の歌が引用されていることになる。一ページ一八行一段組みで、しかもところどころに半ページの挿絵のはいっている二八七ページの小説に、六十余首に及ぶ万葉の歌がちりばめられているのである。たとえ小説の主人公が素人の万葉学者であるにしろ、いかにその引用が多いかがわかるであろう。しかも、その万葉の歌は、ほとんど『万葉集』全巻から引用されているのである。（厳密に言えば、巻第九、十六、十八の三つの巻の歌は見られないがそれ以外の巻からは、すべて取られている。）

けれども、それが臭みになることなく、千沼鏡史郎が大伴家持のもじりとしての人間像であるように、その作品のパロディとして生きているのである。作品がこのような完成度を見せるためには、その作者がよほど万葉の世界に通じていなくてはなるまい。私はここに、井上靖の万葉受容の深さを見るのである。

もう一つこの小説で注目すべきことがある。それは鏡史郎一行が筑波山麓から東山道にはいり、高崎、小諸、長野を経て高田へ、さらに北陸道に沿って一旦直江津に行き、そこから富山の高岡へ向かうことである。この

高岡こそは越中の国府であって、天平十八年から天平勝宝三年まで、大伴家持が国司として生活していたところであった。鏡史郎はこの高岡を夢見て、「家持は二十九歳から三十四歳までの壮年期をここで送っている。家持は長短併せて二百首を越す歌をここで作っているのである。ああ、家持！　剣太刀いよよ研ぐべしと詠った家持よ！」と心の中で叫んでいる。この主人公の家持志向はまた、そのまま、前述した作者の家持志向でもあった。

三

『夜の声』執筆によっていよいよ万葉の世界に沈潜していった井上靖は次に小説『額田女王』を書く。これは彼にとっての必然であった。

額田王は淀ぎみや楊貴妃同様、井上好みのヒロインである。誤解を恐れずに言えば、これらのヒロイン像には祖母かのと叔母まちのイメージが重ね合わされている。つまり、彼の幼時の両者への思慕が具象化された時にこれらのヒロインが誕生したのである。

この小説において、井上靖は額田王を神に仕える女として扱い、また、人麿、赤人へと継承されていく宮廷歌人として位置づけている。これは折口信夫の「額田女王」（全集・第九巻）や、その説を承ける谷馨の『額田王』の考え方を踏襲したものといえよう。と同時に彼はまた彼女をそれ以上のひとりの人間、女性として表現しようともしている。そして、それが万葉の歌と書紀の歌謡の、小説における彼独自の扱い方となって現われているのである。

後掲の一覧によってわかるように、この小説には『万葉集』の歌二十一首、『日本書紀』の歌謡八首が取られている。その中で挽歌が十三首、挽歌的な歌謡が六首も引用されているのだ。死者を悼み追懐するこれらの歌をめぐって、額田女王の心も人間的に揺れている。ここに井上靖の創作上の一工夫を見ることができる。

もう一つ、万葉の歌の解釈をめぐる彼の異見が、この小説にはある。それは次の二首の歌をめぐってである。

あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る

紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ恋ひめやも

この歌は、富士谷御杖の『萬葉集燈』などで道徳的に曲解されているのを始めとして、いろいろな問題を含んでいる歌であり、巻第一の三山の歌とともに、壬申の乱の遠因をなすものだとも言われた歌である。しかしまた一方では、雑歌の部立に分類されていることから、折口信夫などは、早くから宴席での歌であろうと前引書で述べ、池田弥三郎もその説を承けて「蒲生野に遊猟をした時の宴会の歌である」[6]と説いている。この問題のある歌を、井上靖はその小説化にあたって、次のように解釈している。

「（前略）額田は一日の行楽に於ける出来事を歌の形で発表したが聞かせる相手は大海人皇子ではなく、むしろ天智天皇である。

お聞かせしましょうか、こんなことがありました、茜さす紫野を行き、標野を行ったら、あの人は袖を振りました、森番が見てはいなかったかと思って、はらはらいたしました。

これに対して、大海人皇子もまた即興的に自分の歌を披露したが、大海人皇子の方もまた天智天皇を意識して作歌していた。人妻故にと詠っていることで、相手が天智天皇の女性であるという見方をはっきり示し、はっきりと示すことで天智天皇を立て、そしてまたそういう女性でも自分は恋さずにいられないと詠うことで、所詮はたわむれの歌に過ぎないという性格を出していた。しかし、大海人皇子が意識しようと、しまいと、その歌は天智天皇に聞かせる歌であると共に、また一方で額田王にも聞かせる歌になってしまったのである。そういう意味ではやはり大海人皇子の曽ての愛人に対する気持が底に息づいていると言うほかなかった。」

（『わが一期一会』より）

さて、ここで私は前述したこの小説における挽歌の多用に注目したい。『額田女王』の執筆過程において、『万葉集』の挽歌や『日本書紀』の挽歌的な歌謡の世界に遊んだ彼の内部には、挽歌についての彼自身の見解が生じてきた。

もともと井上靖の作品には、挽歌的な発想を持ったものが多く、その資質が、万葉の世界に出入しているうちに、その本源的な挽歌にめぐり逢ったとも考えられるのである。そしてそれが『星と祭』という小説に意識的に使われていったのである。そのことについて、彼自身次のように述べている。

「私は『星と祭』という小説で、琵琶湖で遭難死した娘と対話する父親を書いている。娘の死が確実であっても、それをどうしても信じることができず、その死を諦めきれぬ父親は絶えず娘と対話している。父は娘に捧げる挽歌を心の中で詠い続けているようなものである。この父に於ては、娘の死が遠くなり、その悲しみが薄らぐまで、娘を殯（もがり）している期間は続くのである。」（『わが一期一会』）

この挽歌についての彼の見解は、同書に次のように書かれている。

「（前略）国文学雑誌で、挽歌というものは殯（もがり）の期間に詠われるものであるという専門家のエッセーを読んで、なるほどと思ったことがあった。殯というのは仮葬のことであり、往古貴人が亡くなると、いったん仮葬しそしてある期間を置いてから本葬を営んでいるが、その本葬と仮葬の間が殯の期間ということになる。どうしてこのようなことが行われていたかと言うと、人間は死んでも、ある期間は生でもなく、死でもない世界に居るという考えがあったからであり、こういう考え方からすると、ある期間は仮葬しておいて、その上で本葬を営むという手段が必要になってくる。しかし、古代人でも本気で生と死の間に、生でも死でもない世界があると考えていたわけではないだろう。ただそういう期間を、つまり故人に対する悲しみがまだ生々しく続いている期間を、相手が生でも死でもない世界にいると想定し、それを殯の期間としていたのではないか、と思われる。」

ここに引用したものは、いわば作者の自作解題であるが、これと同趣の部分が『星と祭』の本文にもある。[7] 主人公架山が琵琶湖で水死したまま遺体が発見されない娘みはると対話を交わし、殯（もがり）（仮葬）に思い至る時、ある国文学研究雑誌で、若い国文学者の〝もがり〟に関する新しい論文を読んで、万葉集の挽歌がこの〝もがり〟の期間に詠まれている追悼歌だと知る部分である。「架山は〝もがり〟という言葉に敏感になっていたので、新聞の広告欄の片隅に収められてある国文学研究雑誌の小さい論文の題名に眼を留めた」という小説本文の箇所や、この小説が昭和四六年5月から発表されていることから考えて、右のエッセーまたは論文と書かれているものが、昭和四五年七月号「解釈と鑑賞」に掲載されている渡瀬昌忠の論文「人麻呂殯宮挽歌の登場―その歌の場をめぐって―」ではあるまいかと推測されるのであるが、しかし、その内容は、必ずしも井上靖のそれとは合致しない。[8] 渡瀬はまた、昭和四六年九、一〇、一二月号の「文学」に、「島の宮」という論文をも発表しており、これらの論文も候補に上げることができる。しかし先に掲げた二つの要件から考えて、やはり無理だと考えられる。おそらく井上靖は渡瀬の論文や、それが掲載されていた「解釈と鑑賞」（特集として「万葉の挽歌」が取り上げられている）を読み、そこから彼自身の挽歌観を得たのであろう。福田宏年が「『殯』が、死者との対話の期間であるという説は、実は井上靖の創見である。（略）井上がこの新説の思いつきを国文学者に語ったところ、その創見に相手は驚いていたということである。[9]」と紹介しているところに、その間の事情が察せられる。

おわりに

井上靖の万葉集受容は、以上において見てきたように、大伴家持の歌の彼独得の内面化に端を発し、それが彼独自の文学を生み出していく要因となる一方、『夜の声』の小説化によって深められ、やがて『額田女王』を経て、挽歌の世界を小説として具象化するという形においてなされた。(10) この挽歌の世界の小説化は、実は彼においてはすでになされていたことであって、それが、彼が『星と祭』を書く時点まで『万葉集』を受容してきて初めて彼自身の内面から意識的に照射されるに至ったのである。それはある意味では『万葉集』の挽歌が逆に、井上靖の文学の本質を彼に語りかけてきたことでもあった。ここに私は彼の万葉集受容の窮極を見るのである。

井上靖の作品に引用されている万葉集の歌一覧

(一) 『私の自己形成史』

① 剣大刀いよよとぐべし古ゆさやけく負いて来にしその名ぞ
4467 剣大刀いよよ研ぐべし古ゆ清けく負ひて來にしその名そ
（巻第二十　　）

② 伊豆の海たつ白波のありつつもつきなむものをみだれしめめや
3360 伊豆の海に立つ白波のありつつも繼ぎなむものを亂れしめめや
（巻第十四　相聞　）

(二) 『夜の声』

① 〃道の辺の草深百合〃
2467 路の邊の草深百合の後にとふ妹が命をわれ知らめやも
（巻第十一　寄物陳思）

② 〃筑波根のさ百合の花〃
4369 筑波嶺のさ百合の花の夜床にも愛しけ妹そ晝も愛しけ
（巻第二十　防人等歌）

③ 〃吾妹子が家の垣内のさ百合花〃
1503 吾妹子が家の垣内の小百合花後とし云はば不欲とふに似む
（巻第八　夏相聞）

④ 〃みすず苅る信濃の真弓〃（97番歌にも同句あり）
96 み薦刈る信濃の眞弓わが引かば貴人さびていなと言はむかも
（巻第二　相聞）

⑤ 〃みちのくの安太多良真弓〃（3437番歌にも同句あり）
1329 陸奥の安多良眞弓弦着けて引かばか人の吾を言なさむ
（巻第七　譬喩歌）

⑥ 天地の　神を祈りて　幸矢貫き／筑紫の島を　さして行く吾は
4374 天地の神を祈りて征箭貫き筑紫の島をさして行くわれは
（巻第二十　防人等歌）

⑦ 〃磐が根のこごしき〃山（1332番歌にも同趣の句あり）
301 磐が根のこごしき山を越えかねて哭には泣くとも色に出でめやも
（巻第三　雑　歌）

⑧ 〃さを鹿の鳴く〃山
953 さ男鹿の鳴くなる山を越え行かむ日だにや君にはた逢はざらむ
（巻第六　雑　歌）

⑨ 〃夕されば ひぐらし来鳴く〃山
3589 夕されば ひぐらし來鳴く生駒山越えてそ吾が來る妹が目を欲り
（巻第十五　遣使新羅国の使人の歌）

⑩ 〃千鳥鳴くみ吉野川〃
915 千鳥鳴くみ吉野川の川音なす止む時無しに思ほゆる君
（巻第六　雑　歌）

⑪ 〃絶えず逝く明日香の川〃
1379 絶えずゆく明日香の川の淀めらば故しもあるごと人の見まくに
（巻第七　譬喩歌）

⑫ 家人の　待つらむものを　つれもなき／荒磯をまきて　ふせるきみかも
3341 家人の待つらむものをつれもなく荒磯を纏きて伏せる君かも
（巻第十二　挽　歌）

⑬ 剣大刀　いよよ研ぐべし／いにしへゆ／さやけく負ひて　来にしその名ぞ
（『私の自己形成史』の項①と同じ）

⑭ 〃足乳根の母のみことは〃
443 の長歌の一部「垂乳根の母の命は齋瓮を前にすゑ置き……」
（巻第三　挽　歌）

⑮ 〃足乳根の母と別れて〃
4348 たらちねの母を別れてまことわれ旅の假廬に安く寢むかも
（巻第二十　防人等歌）

⑯ 妹も我も一つなれかも
276 妹もわれも一つなれかも三河なる二見の道ゆ別れかねつる
（巻第三　雑　歌）

⑰ 天の下　すでに覆いて　降る雪の　光を見れば　とうとくもあるか。
3923 天の下すでに覆ひて降る雪の光を見れば貴くもあるかも
（巻第十七　）

⑱ 沫雪の　ほどろほどろに　ふりしけば　平城の京都し　念ほゆるかも。
1639 沫雪のほどろほどろに降り敷けば平城の京し思ほゆるかも
（巻第八　冬雑歌）

⑲ わが背子は　今か今かと出てみれば　沫雪降れり　庭もほどろに
2323 わが背子を今か今かと出で見れば沫雪降れり庭もほどろに
（巻第十　冬雑歌）

⑳ この雪の　消のこる時に／いざ行かな／山たちばなの　実の光るも見む
4226 この雪の消殘る時にいざ行かな山橘の實の照るも見む
（巻第十九　）

㉑ 〃しら玉のわが子〃
904 「戀男子名古日歌」の長歌に「白玉のわが子古日は……」とある。
（巻第五　雑歌）

㉒ 家にあれば　笥に盛る飯を　草枕／旅にしあれば　推の葉に盛る
142 家にあれば笥に盛る飯を草枕旅にしあれば椎の葉に盛る
（巻第二　挽歌）

㉓ 立ちしなう　君が姿を忘れずば　世のかぎりにや　恋い渡りなん。
4441 立ちしなふ君が姿を忘れずは世の限りにや戀ひ渡りなむ
（巻第二十　）

㉔ 天ざかる　鄙にも月は照れれども　妹ぞ遠くは別れ来にける。
3698 天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ來にける
（巻第十五　）

㉕ わが面の　忘れむ時は　国溢り／峰に立つ雲を　見つつ偲ばせ
3515 吾が面の忘れむ時は国はふり嶺に立つ雲を見つつ偲はせ
（巻第十四　相　聞）

㉖ 命畏み、闘いの野に征で
同趣の句が 4394、4398、4408 などの防人歌に見える。

㉗ わぎもこに　恋ふるに吾は／たまきはる／短き命　惜しけくもなし
3744 吾妹子に戀ふるに吾はたまきはる短き命も惜しけくもなし
（巻第十五　中臣朝臣宅守の歌）

㉘ 若の浦に潮満ち来れば潟を無み芦辺をさして鶴鳴き渡る
919 若の浦に潮滿ち來れば潟を無み葦邊をさして鶴鳴き渡る
（巻第六　雑歌）

㉙ 筑波嶺に　雪かも降らる　否をかも　愛しけ児ろが　布乾さるかも

3351 筑波嶺に雪かも降らる否をかもかなしき児ろが布乾さるかも
（巻第十四　東　歌）

㉚ 春の野に　すみれ摘みにと来しわれそ　野をなつかしみ　一夜寝にける。
1424 春の野にすみれ採みにと来しわれそ野をなつかしみ一夜寝にける
（巻第八　春雑歌）

㉛ あかねさす紫野
20 あかねさす紫野行き標野行き野守は見ずや君が袖振る
（巻第一　雑歌）

㉜ 紫草の匂える妹
21 紫草のにほへる妹を憎くあらば人妻ゆゑにわれ戀ひめやも
（巻第一　雑歌）

㉝ 庭に立つ　麻手刈り干し／布曝す／東女を　忘れ賜ふな
521 庭に立つ麻手刈り干し布さらす東女を忘れたまふな
（巻第四　相聞）

㉞ おもしろき　野をばな焼きそ／古草に　新草まじり／生ひは生ふるがに
3452 おもしろき野をばな焼きそ古草に新草まじり生ひは生ふるがに
（巻第十四　雑　歌）

㉟ 母父も　妻も子どもも　たかだかに　来むと待つらむ　人の悲しさ
3340 母父も妻も子どもも高高に來むと待つらむ人の悲しさ
（巻第十三　挽歌）

㊱ 家知らば　行きても告げむ　妻知らば　来も問はましを　玉桙の　道だに知らず　おぼほしく　待ちか恋ふらむ　愛しき妻らは
220 の人麿の長歌の最後の部分。「家知らば　行きても告げむ　妻知らば　來も問はましを　玉桙の　道だに知らず　おぼぼしく　待ちか戀ふら
む　愛しき妻らは
（巻第二　挽　歌）

㊲ 立山の雪し来らしも　はえつきの　川の渡瀬　あぶみ浸かすも。
4024 立山の雪し消らしも延槻の川の渡瀬鐙浸かすも
（巻第十七　）

㊳ もののふの　八十をとめらが　汲みまごう　寺井の上の　かたかごの花
4143 物部の八十少女らが汲みまがふ寺井の上の堅香子の花
（巻第十九　）

㊴ しを路から　直越え来れば／羽咋の海　朝凪ぎしたり／船かぢもかも
4025 之乎路から直越え來れば羽咋の海朝凪ぎしたり船楫もがも
（巻第十七　）

㊵ 珠洲の海に　朝びらきして／漕ぎ来れば　長浜の湾に／月照りにけり
4029 珠洲の海に朝びらきして漕ぎ來れば長濱の灣に月照りにけり
（巻第十七　）

㊶ しなさかる　越にいつとせ　住み住みて　立ち別れまく　惜しき宵かも。
4250 しな離る越に五箇年住み住みて立ち別れまく惜しき宵かも
（巻第十九　）

㊷ あじま野に　宿れる君が　帰り来む／時の迎へを　いつとか待たむ
3770 あぢま野に宿れる君が歸り來む時の迎へを何時とか待たむ
（巻第十五　）

㊸ 帰りける　人来れりと　いひしかば／ほとほと死にき　君かと思ひて
3772 歸りける人來れりといひしかばほとほと死にき君かと思ひて
（巻第十五　）

㊹ 塩津山　うち越え行けば／わが乗れる　馬ぞつまづく／家恋ふらしも

365 鹽津山うち越え行けば我が乘れる馬そ爪づく家戀ふらしも
（巻第二　雑　歌）

㊺ 相坂を　うち出でて見れば　淡海の海　白木綿花に　波立ち渡る。
3238 相坂をうち出でて見れば淡海の海白木綿花に波立ち渡る
（巻第十三　雑　歌）

㊻ いづくにか　吾は宿らむ　高島の／勝野の原に　この日暮れなば
275 何處にかわれは宿らむ高島の勝野の原にこの日暮れなば
（巻第三　雑　歌）

㊼ 〃石走る垂水の上の早蕨〃
1418 石ばしる垂水の上のさ蕨の萌え出づる春になりにけるかも
（巻第八　春雑歌）

㊽ 〃うらうらと照れる春日にひばり〃
4292 うらうらに照れる春日に雲雀あがり情悲しも獨りしおもへば
（巻第十九　　）

㊾ ささの葉は　み山もさやに　みだれども／吾は妹思ふ　別れ来ぬれば
133 小竹の葉はみ山もさやに亂るともわれは妹思ふ別れ來ぬれば
（巻第二　相　聞）

㊿ 石見のや　高角山の　木の間より／我が振る袖を　妹見つらむか
132 石見のや高角山の木の際よりわが振る袖を妹見つらむか
（巻第二　相聞）

(51) くさまくら　旅去にし君が　帰りこむ　月日を知らむ　すべの知らなく。
3937 草枕旅去にし君が歸りこむ月日を知らむ爲方の知らなく
（巻第十七　　）

(52) くもり夜の　たどきも知らに　山越えて　います君をば　何時とか待たむ。
3186 曇り夜のたどきも知らぬ山越えて往ます君をば何時とか待たむ
（巻第十二　悲別歌）

(53) うつせみの　命を長く　ありこそと／留れる吾は　いはひて待たむ
3292 うつせみの命を長くありこそと留れるわれは齋ひて待たむ
（巻第十三　相聞）

(54) ——ととのふる　鼓の音は　雷の　音と聞くまで　吹き響せる　小角の音も　敵見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに　捧げたる　幡の靡きは　冬ごもり　春さり来れば——
199 の人麿の長歌の一部に「齊ふる　鼓の音は　雷の聲と聞くまで　吹き響せる　小角の音も　笛の音は　敵見たる　虎か吼ゆると　諸人の　おびゆるまでに一に云ふき惑ふまで聞　捧げたる　幡の靡は　冬ごもり　春さり來れば」
（巻第二　挽歌）

(三)『額田王』

① 妹が家も／継ぎて見ましを／大和なる／大島の嶺に／家もあらましを
91 妹が家も繼ぎて見ましを大和なる大島の嶺に家もあらましを
（巻第二　相　聞）

② 秋山の／樹の下隠り／逝く水の／吾こそ益さめ／御思よりは
92 秋山の樹の下隱り逝く水のわれこそ益さめ御思よりは
（巻第二　相聞）

③ 磐白の／浜松が枝を／引き結び／真幸くあらば／また還り見む
141 磐代の濱松が枝を引き結び眞幸くあらばまた還り見む
（巻第二　挽　歌）

④ 家にあれば／笥に盛る飯を／草枕／旅にしあれば／椎の葉に盛る
142 の歌（『夜の声』の㉒と同じ歌）
（巻第二　挽　歌）

⑤ 熟田津に／船乘りせむと／月待てば／潮もかなひぬ／今は榜ぎ出でな

8 熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな

（巻第一　雑　歌）

⑥ 味酒　三輪の山／あをによし　奈良の山の／山の際に　い隠るまで／道の隈　い積るまでに／つばらにも　見つつ行かむを／しばしばも　見放けむ山を／情なく　雲の　隠さふべしや

17 味酒　三輪の山　あをによし　奈良の山の　山の際に　い隠るまで　道の隈　い積るまでに　つばらにも　見つつ行かむを　しばしばも　見放けむ山を　情なく　雲の　隠さふべしや

（巻第一　雑　歌）

⑦ 三輪山を／しかも隠すか／雲だにも／情あらなも／隠さふべしや

18 三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなも隠さふべしや

（巻第一　雑　歌）

⑧ 茜さす／紫野行き／しめ野行き／野守は見ずや／君が袖振る

20 の歌（『夜の声』の㉛の歌と同じ）

（巻第一　雑　歌）

⑨ 紫草の／にほへる妹を／憎くあらば／人妻ゆゑに／吾恋ひめやも

21 の歌（『夜の声』の㉜の歌と同じ）

（巻第一　雑　歌）

⑩ 冬ごもり／春さり来れば／鳴かざりし　鳥も来鳴きぬ／咲かざりし　花も……

咲かざりし　花も咲けれど／山を茂み　入りても取らず／草深み　取りても見ず／秋山の　木の葉を見ては／黄葉をば　取りてぞしのぶ／青きをば　置きてぞ歎く

そこし恨めし

秋山われは

16 冬ごもり　春さり來れば　鳴かざりし　鳥も來鳴きぬ　咲かざりし　花も咲けれど　山を茂み　入りても取らず　草深み　取りても見ず　秋山の　木の葉を見ては　黄葉をば　取りてそしのふ　青きをば　置きてそ歎く　そこし恨めし　秋山われは

（巻第一　雑　歌）

⑪ 青旗の／木幡の上を／かよふとは／目には見れども／ただに逢はぬかも

148 青旗の木幡の上をかよふとは目には見れども直に逢はぬかも

（巻第二　挽　歌）

⑫ 人はよし／思ひ止むとも／玉鬘／影に見えつつ／忘らえぬかも

149 人はよし思ひ止むとも玉鬘影に見えつつ忘らえぬかも

（巻第二　挽　歌）

⑬ いさなとり　近江の海を／沖放けて　漕ぎ来る船／辺附きて　漕ぎ来る船／沖つ櫂　いたくなはねそ／へつ櫂　いたくなはねそ／若草の　つまの　思ふ鳥立つ

153 鯨魚取り　淡海の海を　沖放けて　漕ぎ來る船　邊附きて　漕ぎ來る船　沖つ櫂　いたくな撥ねそ　邊つ櫂　いたくな撥ねそ　若草の　夫の　思ふ鳥立つ

（巻第二　挽　歌）

⑭ うつせみし　神にたへねば／さかり居て　朝歎く君／はなり居て　吾が恋ふる君／玉ならば　手にまき持ちて／衣ならば　ぬぐ時もなく／吾が恋ふる　君ぞきその夜／夢に見えつる

150 うつせみし　神に堪へねば　離り居て　朝嘆く君　放り居て　わが戀ふる君　玉ならば　手に卷き持ちて　衣ならば　脱く時もなく　わが戀ふる　君そ昨の夜　夢に見えつる

（巻第二　挽　歌）

⑮ ささ浪の／大山守は／誰がためか／山に標結ふ／君もあらなくに

154 ささ浪の大山守は誰がためか山に標結ふ君もあらなくに

（巻第二　挽歌）

⑯ かからむと／かねて知りせば／大御船／泊てしとまりに／標結はまし

を

151 かからむの懐知りせば大御船泊てし泊りに標結はましを

（巻第二　挽歌）

⑰ ととのふる　鼓の音／いかづちの　音と聞くまで／吹きなせる　小角

の音も／敵見たる　虎かほゆると／もろ人の　おびゆるまでに／捧げた

る　旗の靡きは／冬ごもり　春さり来れば……

199 の長歌の一部。（『夜の声』の㊹と同じ）

（巻第二　挽歌）

⑱ やすみしし　わご大君の／かしこきや　御陵仕ふる／山科の　鏡の山

に／夜はも　夜のことごと／昼はも　日のことごと／哭のみを　泣きつ

つありてや／百磯城の　大宮人は　去き別れなむ

155 やすみしし　わご大君の　かしこきや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山

に　夜はも　夜のことごと　晝はも　日のことごと　哭のみを　泣き

つつ在りてや　百磯城の　大宮人は　去き別れなむ

（巻　第二　挽　歌）

⑲ 三諸の神の／神杉／夢にだに／見むとすれども／いねぬ夜ぞ多き

156 三諸の神の神杉夢にだに見むとすれども寝ねぬ夜ぞ多き

（巻第二　挽　歌）

⑳ 三輪山の／山べまそゆふ／短かゆふ／かくのみゆゑに／長くと思ひき

157 三輪山の山邊真麻木綿短木綿かくのみ故に長しと思ひき

（巻第二　挽　歌）

㉑ 山吹の／立ちよそひたる／山清水／汲みに行かめど／道の知らなくに

158 山振の立ち儀ひたる山清水酌みに行かめど道の知らなく

（巻第二　挽　歌）

（以上のほかに『日本書紀』の歌謡八首が引用されている。）

(四)　『四角な船』

① 白木綿花に波立ちわたる

3238 の歌（『夜の声』の㊺の歌と同じ）

（巻第十三　雑　歌）

②直接的には引用されていないが、安曇川が万葉集にも出ているという会話があり、1238、1690、1718 などの歌が、その背景となっている。

(五)　『星と祭』

①直接的な引用はないが、万葉集の挽歌の発想様式を意識的に使って書かれたもの。

(六)　『美しきものとの出会い』

① 古にありけむ人も吾が如か三輪の檜原に插頭折りけむ

1118 いにしへにありけむ人もわが如か三輪の檜原に插頭折りけむ

（巻第七　雑　歌）

(七)　『歴史小説の周囲』

① 神のみことの　大宮は　ここと聞けども　大殿は　ここといへども

春草の　茂く生ひたる　霞立つ　春日の霧れる　ももしきの　大宮どこ

ろ　見れば悲しも

29 人麿の長歌の一部「神の尊の　大宮は　此處と聞けども　大殿は　此

處と言へども　春草の　繁く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる　もも

しきの　大宮處　見れば悲しも

（巻第一　雑　歌）

② 「あかねさす」の歌。前出 20

③ 「紫草の」の歌。前出 21

④ 「古にありけむ人も」の歌。前出 1118

⑤「磐白の」の歌。前出141
⑥「家にあれば」の歌。前出142
⑦「味酒　三輪の山」の歌。前出17
⑧「三輪山を」の歌。前出18

(八)『わが一期一会』

① 旅人の宿りせむ野に霜ふらば吾が子羽ぐくめ天の鶴群
1791 旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子羽ぐくめ天の鶴群
（巻第九　相聞）

② 「あかねさす」の歌。前出20
③ 「紫草の」の歌。前出21
④ 今日零りし雪に競ひて我が屋前の冬木の梅は花咲きにけり
1649 今日降りし雪に競ひてわが屋前の冬木の梅は花咲きにけり
（巻第八　冬雑歌）

⑤ 沫雪かはだれに零ると見るまでに流らへ散るは何の花ぞも
1420 沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花そも
（巻第八　春雑歌）

⑥ この雪の消遺る時にいざ行かな山たちばなの実の光るも見む
4226 の歌。（『夜の声』の⑳の歌と同じ）

〈出　典〉
(一)『日本現代文學全集102』、講談社・昭和四六年二月一五日刊
(二)『夜の声』・新潮社・昭和四八年八月一五日刊
(三)『井上靖小説全集29』・新潮社・昭和五〇年三月二〇日刊
(四)『四角な船』・新潮社・昭和四七年七月一五日刊
(五)『井上靖小説全集32』・新潮社・昭和五〇年四月二〇日刊
(六)『美しきものとの出会い』・㈱文藝春秋・昭和四八年六月二五日刊
(七)『歴史小説の周囲』・講談社・昭和四八年二月二四日刊
(八)『わが一期一会』・毎日新聞社・昭和五〇年一〇月一五日刊

対照した『万葉集』
『日本古典文學大系・萬葉集一～四』・岩波書店

注（1）「解釈と鑑賞」昭和四二年二月号・至文堂
注（2）講談社・昭和四八年二月二四日刊
注（3）『大伴家持―日本詩人選5―』筑摩書房・昭和四六年七月一〇日刊
注（4）「國學院雑誌」第七三巻第四号
注（5）拙稿「『夜の声』試論」（『文化』48号・東京都教職員文化会刊）
注（6）「宗教と民俗」（「解釈と鑑賞」昭和三四年五月号）
注（7）『井上靖小説全集32』一〇五ページ～一〇八ページ
注（8）渡瀬は挽歌とは殯の期間に詠まれる追悼歌だとは、必ずしも言っていないし、また井上の自作解題の後半部に該当するようなことも述べてはいない。
注（9）井上靖小説全集32「星と祭」付録の「解説」
注（10）拙稿「挽歌の系譜」（「國學院雑誌」第七三巻第四号）